

平成二十六年二月十七日

現在開催中のソチ冬季オリンピックに於て羽生結弦選手男子フィギュアスケートに於て優勝、金メダルに輝く。最初のショートプログラムに於て世界初の101・四五を得点し、最終フリーの試合にては序盤ミスにて出遅る、も後半確實に得点を重ね、遂に日本人選手オリンピックこの種目に登場して以来八十二年後の快挙を達成すと云々。

その後半の演技にイナバウアーの挿入あり。これ平成十八年(二〇〇六)トリノにて荒川静香選手女子フィギュア日本人初の金メダルを獲得せる試合にて披露し、同選手の代名詞ともなりける技なれば、氷上初の金メダルとの關聯に就き或奇想の感懷を覺ゆ。

元來イナバウアーなる技、ドイツの女子フィギュア Ina Bauer 選手の創出にか、り、正規に要求せらる、技術要素には非ざるも、その中の上半身を反らす「レイバック・イナバウアー」は金メダリストの使用とて特に有名となれり。

然るを日本人なる吾はこの語より別物を聯想す。先づ「イナ」は稻穂なり。日本書紀天智天皇三年條に「稻生而穂。其旦垂穎而熟。(稻生ひて穗いでたり。その旦に垂穎して熟なり)」とあり、また西行法師も「夕露の玉しく小田のいな筥かぶす穂末に月ぞ澄みける」と歌ふ。實に「かぶす」稻穂の波打つ田の面の風景こそは豊葦原瑞穂國の原風景にして、我が民族に幸を齎らし來たれり。特に「かぶす」は頭を垂る、の意にて、「稔るほど首を垂る、稻穂かな」とも、これ當に英語の bowler (首を垂る、もの) なれば、イナバウアーは我が日本人にとりては稔りたる稻穂を象徴するものにあらざらむや。春の田植より始めて秋の收穫に至るまで丹精を籠めたる稻穂への思ひには復た格別のものあり。その特質の一つは生業に勤み「出來高」を喜ぶ文化なり。

一方、世界には勞働は人類の罪業に對する神の罰なれば神聖なる苦痛と感じ、勞働に従事する「時間」を厭ふ文化ある中、最近その影響我が國にも及び、民間企業に於ける働き方に劇的の變化を齎らせり。定時勞働の後には完全なる自由時間なりとし、謂はゆる非正規勞働、一時持て囃さる、も、地位の不安定、賃銀の低下などの問題顯在化せり。教育に於ても特に小・中・高に於ける勉學を「苦痛」として、その緩和策として「ゆとり教育」頻りに唱道せられたり。最近その弊害著しきを以て見直し行はれつ、あるも、一旦低下せる民度の恢復は容易からず。

スポーツ、藝術の世界にては、生業に勤み「出來高」を喜ぶ日本文化なほ健在の如し。三四歳の幼兒入門して厳しき先生の指導を嬉々として受く。師弟の關係は生涯續き練習の進捗は無論のこと、一身上の悩みにも進みて相談す。但し師の權威を笠に著たる暴力沙汰多發するは延いてこの文化を危くする虞あり。

かくして良き師に恵まれ、決勝にイナバウアーを演じたる荒川、羽生兩選手八束穂の稻穂の靈驗殊勝に、見事優勝を飾りけるにや。